
とある科学の武器投影

竜胆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の武器投影

【Nコード】

N9032Y

【作者名】

竜胆

【あらすじ】

これは学園都市に住む姉弟の物語です…

稚拙な文で、独自解釈やオリキャラ等がですが、楽しんでもらえると幸いです…。

第一話 日常（前編）

学園都市――

東京西部の未開拓地を一気に切り開いてつくられた学生の街で、大小様々な教育機関に研究施設、230万人もの住民をかかえるこの街では――

――「記憶術」や「暗記術」という名の能力開発が行われていた。

これは、そんな街に住むとある二人の姉弟の物語である。

2

「お腹空いた…」

7月20日。

全国の学生にとって1ヶ月近く学校に行かなくていいという長期休暇の始まりの日。

多くの学生たちが夏休みだのプールだの騒いでいるなかで竜胆 鍊はそう呟いていた。

「なんで夏休み初日から財布は冬を迎えてるのさ…！」

暑さのせい、車の通りは多いが人通りは全くない。そんな路上で叫びをあげながら投影したバイク（無免許）で街中を疾走していた。

…

とりあえず財布が空では生きていけないということで、銀行に金を下ろしに行ったのだが…

「昼間からシャッター降りてやがるじゃねーか。銀行強盗でもきてやがんのか？」

鍊の見解は当たっていたらしく、中から”動くんじゃねえ！！”等の声が聞こえてきた。

「マジできてんのかよ…風紀委員待つのめんどいし殴り込みますか。」

「

バイクのアクセルを踏み直し、銀行のシャッターへと突っ込む。

そしてシャッターを突き破り、店内に突入すると予想通りに銀行強盗の真っ最中だった。

「すいまつせーん事故りました！！皆さん怪我はないですか？」
意図的に突入したのだが、あえてふざける。

「な、なにやってんだテメエ!!」

強盗グループの一人が驚いたように声をあげた。ちなみに金髪、ハゲ、グラサンの3人組だった。

「それはこっちの台詞だ!! テメエらが馬鹿げたことやってやがるから金がおろせねえだろうが!!」

正論は正論だが”今そういう空気じゃないよね!?”と、店員や客は内心そう思っていたが強盗犯を刺激しないため口には出さない。

「覚悟はできてんだろうなあ!？」

そう啖呵をきって、

「投影―開始」(トレース―オン)

の掛け声と共に鍊は右手に真紅の槍を投影した。

「お前それなんの能力だ!!」強盗グループのハゲの問いかけに、

「テメエらに教えるつもりはねえ。(設定参照)」

槍を構えたところで、目の前のハゲがぶっ飛んだ。

「鍊! やっぱリアンタだったのね!!」

そう言っただけ現れたのは姉の竜胆。寿々である。

「寿々姉、こいつらは俺の獲物だ。捕らないでもらおうか。」

鍊が寿々にさういって、今度は鍊がぶっ飛んだ。

「アンタは風紀委員じゃないただの一般人でしょうが!!」

「その一般人を容赦なく殴る風紀委員がいてもいいもんかよ!!」

強盗を前にして姉弟喧嘩とは…

「調子に乗ってんじゃねえぞ!!」

金髪とグラサンが痺れを切らして二人に突っ込んできたが、

「邪魔すんじゃないわよ!!」

息ぴったりで鍊は槍の柄でグラサンを、寿々は金髪をぶっ飛ばした。

重ねて言おう。

この物語は、とある姉弟が主役である。――

第一話 日常（前編）（後書き）

いかがだったでしょうか？

キャラ設定（前書き）

タイトル通りキャラクター設定です。

キャラ設定

オリキャラ設定

竜胆 リンドウ 錬 レン

性別：男

所属：柵川中学一年

家族構成

父：

母：

姉：竜胆 寿々

能力名：武器投影 グラデーション・エア

Level 4、今ここに無い物体を一時的に存在させる能力。武器
以外も可能。

8

戦闘センスは中々のもの。大抵の武術を使いこなせる（二流）

身長は約165cm

頭はそこそこいい

ルックスはそれなりにいい

くすんだ金色の短髪でよく高校生に見られることも

免許はないが、車両の運転が可能

左目は義眼

竜胆 寿々（リンドウ スズ）

性別：女

所属：当麻と同じ高校、風紀委員第159支部
家族構成

父：

母：

弟：竜胆 錬

能力名 相対操作 ファンブルコントロール

Level 5 第三位、引力と斥力の操作が可能。引力の応用で小規模のブラックホールも作れる。

戦闘センスはかなり高い

全武術において一流の実力者

身長は約140cm

ものすごい馬鹿

吹寄に次ぐ”対力ミジョー属性”の持ち主

一方通行の数少ない友人

ライトブラウンの長髪

共通設定

当麻と従兄弟、美琴と幼馴染み

キャラ設定（後書き）

主人公の能力は、まんまFateのアーチャーさんです。（汗

主人公達の両親や第159支部の人たちはいずれ出す予定です。

第二話 日常（後編）（前書き）

それではどうぞ。

第二話 日常（後編）

7月21日

成績の悪い生徒には、当然補習授業が存在する。

それは学園都市も例外ではなく、夏休み前日に死刑宣告（補習対象者の呼び出し）を受けて寿々は補習を受けに登校していた。

「あー夏祭りで幼馴染みと再会とか家出少女がつごうよくいたりせえへんかな」

「ラブコメしたいぜいラブコメしたいぜい。海にプールに水着に浴衣。イベントだらけのラブコメ夏休みでも到来しないかにやー」

「お前らはどこまで馬鹿なんだよ。」

補習の真つ最中だというのに上条、土御門、青ピの三馬鹿トリオは相変わらず無意味な議論をしていた。
そこへ…

「上条ちゃん？これ以上喋りやがったらコロンブスの卵ですよー？」

この学校の名物教師、月詠小萌が説教をかまし、”おーけーですか？”そう言って再び黒板に文字を綴っていく。

…

「ていうか、寿々はなんでLevel5なのに補習を受けてんだ？Level5ってのは頭いいんじゃないのか？」
補習が終わって上条は寿々に問いかけたところ―

「うるさい馬上条当麻」

罵倒が帰ってきた。

「従兄弟にその言い様は無いんじゃないか？」

「アンタの従兄弟という事実が一生の恥よ」

「うう…上条さんは心が折れそうです…」

こんな感じの会話を聞いたクラスメイトたちは歓喜の表情で、

「さ、さすがは竜胆！吹寄に次ぐ対力ミジョー属性完全無効化の女！」

「あそこまで完璧な罵倒は吹寄でも無理じゃないか？」

「我々人類の希望やね。竜胆寿々の罵倒スキルを研究すればカミヤンを倒せるかもしれへん！！」

罵倒された上に倒されるのか！？」と、嘆く上条であった。

…

「なんで俺まで連れてくんだ！？あと引きずるのは止めてくれ！！」
錬は、昨日の件の後で、普段から槍とか持ち歩いているのかなど警備員に洗いざらい質問され、厄介な自分の能力の説明をしたり、始末書を書かされたりした。幸いバイクは消しておいたので罰則等はなかったが、帰宅するころには夕日が沈みかけており、急いで帰宅して眠りについた。しかし朝起きるなり御坂美琴から「セブンスミストに買い物行くから錬もついてきなさい」と言われ、無視して眠りについたら御坂美琴とクラスメイトの佐天涙子と初春飾利が突入してきて現在に至るといわけである。

錬の問いかけに対して御坂は、引きずるのをやめ、当たり前のように「荷物持ちに決まってるじゃない。」
と答え、「そんな理由で安眠妨害ですか。人の家に不法侵入ですか。」と、錬は心の中で呟いた。ちなみに寝巻きのジャージのままである。

「そう言えば錬の能力ってなんなの？」

そう問いかけてきたのは佐天だ。ぶっちゃけ今まで大した交流は無かったため、まともに話すのははじめてだったりする。

「わ、私も知りたいです!」

初春も聞いてきた。ぶっちゃけ――(以下略)

まあ聞かれたからには答えるしかないので、

グランデーション・エア

「俺の能力は”武器投影”グランデーション・エア。今ここに無いものを一時的に存在させる能力だまあ見たことのあるものしか出来ないけどな。美琴姉のことだから台車とか用意させるつもりなんじゃないの?荷物持ちっついっぐくらいだし。」

そう言つて鍊は「投影――開始」の掛け声と共に台車を投影した。

「さすがは鍊ね。やっぱアンタの能力便利だわ。」

「だからって朝から呼び出すなよ…」

そんな会話をしていると初春が、

「二人は知り合いなんですか?」

と言う問いを投げかけてきた。

「まあ知り合いというか幼馴染みっていうやつね。」

「ただの腐れ縁。」

同時に答えたところで御坂は鍊にビリビリを食らわせた。

「なんでビリビリするの!? 事実いっただけじゃん!! 全く寿々姉といい美琴姉といいなんですぐに実行行使なのさ!」

悲痛なツツコミを入れつつボロボロの自分の服を見て絶句する。

「とりあえず服を変えなくちゃな…」

「「どうやって!?!」」

初春と佐天が同時にツッコむ。それもそのはず、ここは道のど真ん中だし公衆の面前である。

「投影―開始」

その掛け声と共に鍊のボロボロのジャージがTシャツとジャージに早変わり。超早着替え術である。

「ずるい!ずるいですよ鍊さん!」

声をあげた初春に鍊は、

「いや、ずるいと言われても…」

と、返すことしかできなかった。

そんなこんなで談笑しながら街中を歩いていると数人の男子生徒が一人の男子生徒に絡んでいるのを見かけた。

「なにやってるんですか」

初春が静かに言った。

しかし男子生徒たちは初春の腕章を見るなり、

「風紀委員か、別に何でもねーよ。」

そう言っ立ち去ろうとしたところで鍊が

「何でもねえこたあねーよな?」

男子生徒のうちの一人の肩を掴み、そう言い放った。

「デメエ!なにしゃが…」

言いかけたところで鍊の右手に握られる槍を見て絶句した。

「こいつで突かれなくなきゃあさっさとそいつに謝るんだな。」

男子生徒たちは、しゅしゅ”すまなかった”と、謝ると去っていた。

「大丈夫ですか？」

後ろをみると、初春が絡まれていた男子生徒に声をかけていた。

「もっと早く来いよ…」

悪意に満ちた目でそう言つて男子生徒は去つていった。

「助けられなくてあの言い方はねえよな…」

鍊は走り去つた男子生徒に一瞥すると、再び歩き進めた。

…

第二話 日常（後編）（後書き）

いかがだったでしょうか？

感想ご指摘アドバイスお待ちしております。

第三話 虚空爆破（前書き）

更新は気分です。

第三話 虚空爆破

ここは風紀委員第159支部

「今日は非番じゃ無かったかしら？」

寿々は半分キレ気味で後輩の高橋董を睨む。

「しょうがないじゃないですか。最近”連続虚空爆破事件”が頻発してるんですから。ていうか到着早々ばやくなっつの！」

高橋が愚痴混じりにそういうと、

「先輩相手にその口の聞き方は何？」

と言いつつ寿々は高橋の首をホルルドした。

「窒息する！ギブギブギブアップです先輩！！生意気言っすいませんでした！！」

このまま絞め続けたら本当に窒息しそうなので寿々は放すことにした。

「で、呼び出した用件は何？」

非番なのに呼び出された訳を高橋に尋ねると、

「今までの犯行パターンからして犯人の狙いは私たち風紀委員とということがわかったんです。」

こいつ一応働いてんだな。と関心しつつ続きを聞いていると、

「なので、人通りの多い所でおとーパトロールをお願いします。」

「アンタ今囷って言おうとしたわよね…まあいいわ、行ってきたげる。」

囷という言葉は聞き捨てならなかったが、こっそりサボってやろうという思惑を秘めて寿々は159支部を後にした。

…

——僕が…僕を救う

悪意に満ちた目で、少年は街を歩いていた。

僕を救えない風紀委員は——いない——

…

ところ変わってセブンスミスト。

荷物持ちとして同行を余儀なくされた鍊は女子三人の買い物に付き
合わされていた。

「なあ…俺帰っていいか？」

「…ダメ」

「なんでさー!!」

そんな会話を何度か繰り返したところで、

「あれ？ 錬じゃない。こんなところで何やってんの？」

パトロールサボり中の寿々である。

「俺は美琴姉とクラスメイト二人に荷物持ちとして連行されて今に至るというわけだ。」

錬が自分の身の上を話すと寿々は、

「丁度いいわね。私の分も運んで貰うわ。」

「それはないよね？ 寿々姉まで俺をパシったりしないよね！？」

錬は必死に訴えるも”アンタは私の下僕”という言葉に心をへし折られた。

：

そんなこんなで寿々も合流し、女子4人と心を折られた下僕1人で
買い物が続けると、

B u B u B u B u B u B u

と、寿々と初春の携帯が同時に鳴った。

「重力子の急激な加速が確認されたいわ。しかもここで。例の虚空爆破事件のターゲットにされたいわ。だから初春さんと美琴は避難誘導をしたら即避難。佐天さんと鍊はさつさと避難しなさい。」

寿々が落ち着いて指示を出していく。

「でもそれだと寿々さんが……」

初春と佐天が寿々を心配するが、御坂と鍊は……

「大丈夫、一応Level 15だから。」

声を揃えてそう言った。

……

「全員避難終わったのかしら……」

人1人いないセブンスミストを見渡して寿々は呟いた。しかし……

「お姉ちゃあーん!!」

小さな女の子がぬいぐるみを抱えて走りよってきた。

「メガネをかけたお兄ちゃんがお姉ちゃんに渡して、だつて。」

そう言つて少女はぬいぐるみを渡してきた。が、突然ぬいぐるみが歪み始めた。

だがあえて寿々はぬいぐるみを何事もないように受け取り、歪み続けるぬいぐるみの中心に引力を発生させて、ぬいぐるみそのものを消滅させた。

「怪我はない？」

うん！と、力強い少女の返事を聞いて、寿々は何事もなかったように少女と店を出た。

...

「おかしい、おかしいぞ...なんで爆発しないんだ？」

虚空爆破事件の犯人である介旅初矢は動揺を隠せないでいた。

「そこの兄ちゃん同行願えるかい？」

この状況で1人だけ反応のおかしい介旅を鍊は見逃さなかった。
「ぼ、僕が何をしたというんだい？」

しらばつくれる介旅に、静かに、それでいて威圧を込めた声で、

「しらばつくてんじゃねえよ…爆弾魔。」

そう言つて顔面を蹴り飛ばした。しかし介旅は、

「いつもこうだ…こうして力でねじ伏せられる…殺してやる…お前
みたいなのが悪いんだよ！！さんざん上から人のこと見下しやがつ
て…だから俺は幻想御手^{レベルアップ}で強くなつた！！強くなつて不良共も役立
たずの風紀委員もみんな残らず殺してやるんだ！！」

そう言つて介旅は鞆からスプーンを取り出したが、

「力言い訳にしてんじゃねえぞクソ野郎が！！テメエの曲がつた性
根叩き直してやるから覚悟しやがれ！！」

スプーンを持った手を蹴り上げ、能力を発動し、

「投影―開始！！（トレース―オン）」

介旅の頭上に大量の刀剣が出現する。

「荒療治だ。」 固定解除！！（フォールダウン）」

介旅の頭上にあつた無数の刀剣が落下した。

土煙が上がり、その晴れた先には無傷で泡を噴いて倒れた介旅と、
無数の刀剣がコンクリートに突き刺さっていた。

…

それから程無くして介旅は警備員に連行されていた。

第三話 虚空爆破（後書き）

とりあえず登場した新キャラの設定を、

高橋 堇 タカハシスミレ

性別：女

中学二年生

風紀委員第159支部所属

能力名

ダウンロード
情報転送

Level2、自分の脳内にある情報を他者の脳に送信する能力。
送信できる距離はLevel2で半径500m。送信対象を増やす
ほど距離は縮む。

黒髪ショート、メガネ

159支部の情報整理担当

感想ご指摘アドバイスお待ちしております。

第四話 錬の夏休み（前書き）

虚空爆破から飛んで、再び日常パートに逆戻り。

木山先生ファンの方、誠に申し訳ございません。

第四話 錬の夏休み

幻想御手事件終結から数日後：

俺は第6学区のアミューズメントパークに向かっていた。
ちなみに幻想御手事件の方は寿々姉と美琴姉たちがいろいろと頑張ったらしい。

とりあえずこうなった経緯を話そうと思う。

：

確か昨日のことだった。

一日中寝ていた俺は、起きて着信履歴を見ると『御坂美琴』の四文字。

正直言って、嫌な予感しかなかった。

寿々姉程ではないが、美琴姉も俺を下僕扱いしてくるからである。

しかし、かけ直さないと黒焦げにされそうなので仕方なくかけ直すことにした。

数回のコールの後、美琴姉が電話にでた。

『もしもし?』

「鍊だけどなんの用?」

『明日、第6学区のアミューズメントパーク前に来なさい。来なかったらアンタを感電死させるわ』

予想外にして意味不明な脅迫だった。

感電死という恐ろしい単語より先にアミューズメントパークに呼び出される訳がわからなかった。

美琴姉に事情の説明を求めたが、既に電話は切れていて、” ツー、ツー、” という音だけが耳に残っていた…

…

で、今に至るのであった。

美琴姉の指定した集合に着くと、見知らぬ女子がいた。

制服は確かに常磐台の物だが、美琴姉ではないことは確かだ。だからきつと気のせいだろう。さっきからその女子に呼ばれているのも…

——アレ？

状況を掴めないでいると、美琴姉から電話がかかってきた。

「もしもし？」

『ああ錬？昨日いい忘れてたんだけど集合場所に着いたら藤枝つて子がいると思うから能力の使い方を教えただけ。』

ツー、ツー

また勝手に切られたが、この際仕方ないでしょう。藤枝さんとやらを待たせるのも悪いし。

「えーっと、藤枝さんでいいのかな？」

「はい！今日は竜胆さんに能力の使い方についてのアドバイスをもらいに来ましたー！」

どうやら藤枝さんはやる気らしい。

「じゃあここじゃ落ち着いて話にくいし喫茶店にでも入ろっか。」

「はい！！」

藤枝さんの同意が得られたところで俺たちは近場の喫茶店へと向かった。

…

「とりあえず自己紹介でもしようか。俺は柵川中学一年、竜胆錬だ。」

「私は常磐台中学一年の藤枝渚です」

一年と言ったとき、とても驚いたような顔をしていたのはなんだっ
たんだろうか。

「とりあえず竜胆さんの能力を見せてもらえませんか？」

「それはいいけど、同年代なんだし呼び捨てでもいいんじゃないの
か？」

「男の人を呼び捨てにするのはちよつと抵抗があるので…錬くんつ
て呼んじゃダメですか？」

そう言つて小首をかしげるといふ強力コンボを叩き出した藤枝さん
はなんとというか…その…可愛かった。

「う、うん。それでいいよ。」

「話を本題に戻すけど、錬くんの能力を見せてくれない？」

「わかったよ。『投影—開始！—』」

そう言つて俺はティーカップを作り出した。

「え、いきなりティーカップが出てきましたけど？」

藤枝さんは驚いたようだ。「これが俺の能力、”武器投影”だ。今
ここにない物体を一時的に投影する能力なんだ。普段は武器を作り
出して攻撃するんだけどこんなところで武器なんか出したら警備員
に通報がいつちまうからな。」

「便利ですね」

「次は藤枝さんの能力を見せてもらえる？見ないとアドバイスできないし。」

（私は呼び捨てにしてるんだから渚って呼んでくれてもいいのに…）
「わかりました。このティーカップ使ってもいいですか？」

「どうぞ。」

藤枝さんが能力を使うと、俺の投影したティーカップがつぶれてナイフになった。

「これが私の能力”圧縮変換”です。存在する物を圧縮してその形を変えることができます。」

「それで変化したのか。」

…

「で、互いの能力を説明したのはいいけどこれからどうするの？」

「どうしましょうね…」

「あのさ、藤枝さんさえよければの話だけど、これから第6学区のアミューズメントパークに行かない？」

「はっ、はい！！喜んで！！」

こうして俺たち二人は、アミューズメントパークへと向かった。

そこでの話はまた後日というところで…

第四話 錬の夏休み（後書き）

ラブコメ強めの今回は如何だったでしょうか？
とりあえず今回の新キャラの設定を、

藤枝 渚 フジエタナギサ

（女）

常磐台中学一年

能力

チェンジ・コンプレッション
圧縮変換

Level 3、現実にあるものを圧縮し、形を変える能力。
御坂の後輩。

とまあこんな感じですね。

現在主人公を誰落ちにしようか迷っております。なのでアンケートをとりたいと思います！！

1、初春

2、佐天

3、今回出した新キャラ

4、他の原作キャラ

締め切り予定は今のところありませんので。

感想ご指摘アドバイスお待ちしております！！

第五話 死の鉄槌を（前書き）

前回の続きです。

元ネタはわかるでしょうか？

第五話 死の鉄槌を

前回の続き。

アミューズメントパークの帰り道。

突然だが俺は謎の覆面集団に追われていた。

「何で追いかけてくるのさ！！てかお前らなんなんだよ！！」

「「「「「「「「「「リア充には死の鉄槌を！！」「」「」「」「」

「」

「ハモリすぎて怖ええ！！」

普段なら迎え撃てただろう。しかしこの覆面共は数が多く、鎌やら槍やらライフルやら…

とにかく警備員は何やってんだと言いたいぐらいに銃刀法違反のオンパレードだった。

恐らく、一瞬でもこの足を止めたら殺されるだろう。
当然演算などする余裕もない。

「確保ー！！！！」

「ぎいやああああー！！」

-
-
-

しばらくして俺は、水をかけられて目を覚ました。

どうやら俺は捕まったらしい。

その証拠に手足を縛られ、暗い倉庫のような場所で、目の前にあの覆面集団がいた。

「異端者には」

「死の鉄槌を！！」

「これより、異端者竜胆鍊の裁判を開始する。」

どういう状況だこれは？

「異端者の罪状を読み上げろ、猪狩審問官」

猪狩ってうちのクラスにいなかったっけ？

「はい、川原裁判長。彼は喫茶店で常磐台の女子と会話していたのであります!!」

川原もうちのクラスにいたような…

「つまりわかりやすく言うと？」

「可愛い女子と喋っていたので羨ましいのであります！！」

やっぱりうちのクラスメイトたちだよな！？

「結構だ。ここに異端者竜胆鍊の刑罰を決定する！！審問官たちよ、札を挙げよ！！」

ここだけバラエティーっぽいなオイ

拳がった札は、

死刑×10

「よって死刑！！」

「事情を説明しろ！！」

いきなり殺されてたまるか！！

「どうした異端者竜胆鍊。死刑の内容が気になるのか？」

「そもそも何故に死刑！？」

「『常磐台の女子と喋っていたからだ。』」

「『』」

なんと理不尽な！！

第五話 死の鉄槌を（後書き）

元ネタはわかったでしょうか？

次回は原作ブレイクです。

引き続きアンケートと感想ご指摘アドバイスお待ちしております！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9032y/>

とある科学の武器投影

2011年11月29日12時48分発行